立山町日中墓の段遺跡
調査報告書

――立山の文化 第25号――

昭和49年1月

立山町教育委員会

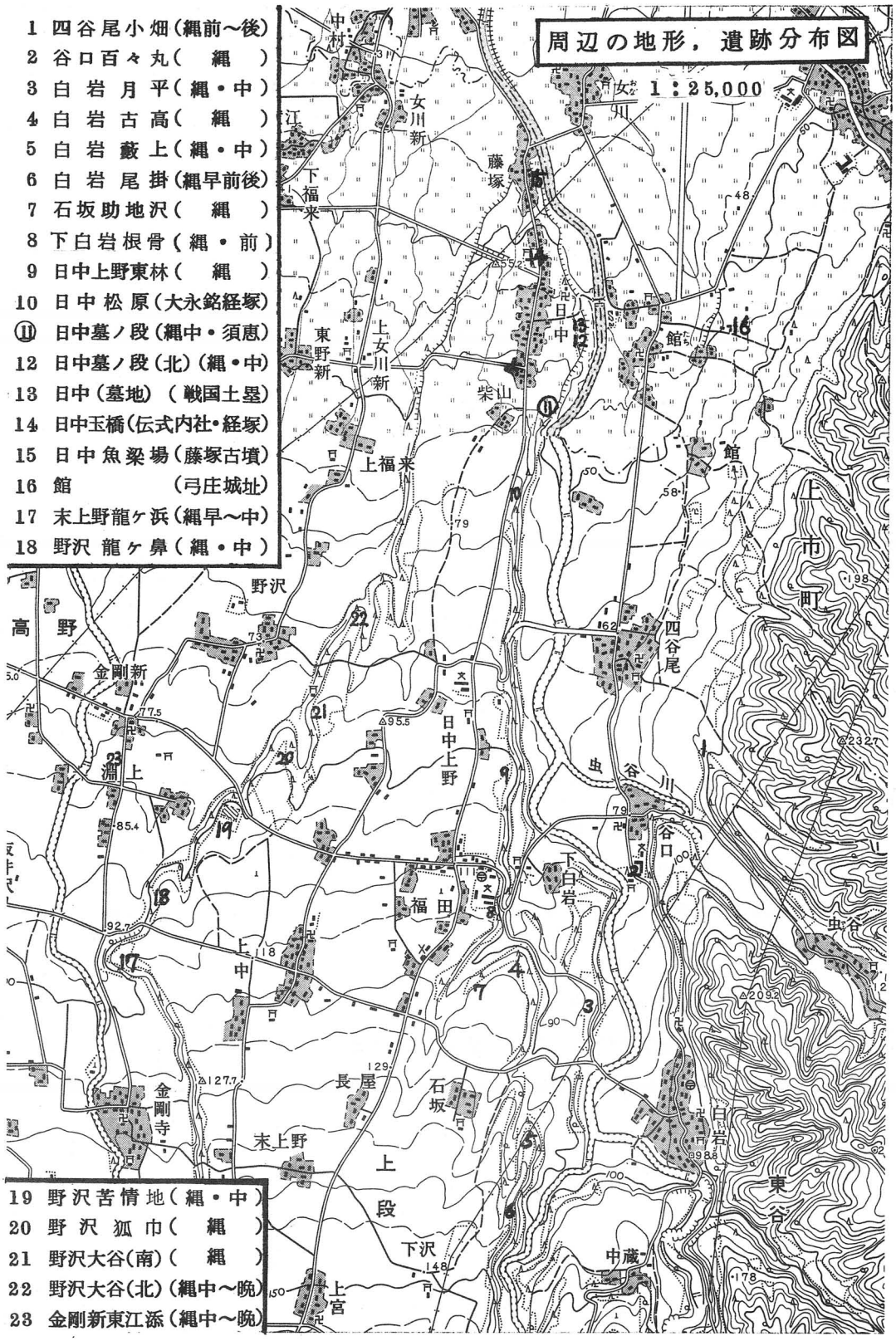
立山町文化財保護調査委員会

―― もくじ ――

1. 遺跡の位置と現状 …… 3ページ
2. 調査の目的と経過 …… 4
3. 調査の概要 …… 5
(1) 土質層序 …… 5
(2) 遺構について …… 5
(3) 遺物について …… 11
① 土器
② 土製品
③ 石器・石片類
4. 考察 …… 13
○ 追記 …… 13

○ 図版
第1図 周辺の地形・遺跡分布図 …… 2
第2図 調査地域および区画図 …… 4
第3図 小竪穴周辺遺構 …… 6
第4図 竪穴北側の石組み断面図 …… 7
第5.6図 代表的土器の復元図 …… 9, 10

○ 写真
①, ② 遺跡台地の遠望 …… 3
③～⑨ 調査地域全景および遺構, 遺物の包含状況 …… 8
⑩～㊸ 土器および土製品 …… 14～18
㊹～㊻ 石器, 石片類 …… 19, 20
㊼～㊿ 表面採集遺物 …… 20


周辺の地形，遺跡分布図
1：25,000
1 四谷尾小畑（縄前～後）
2 谷口百々丸（　縄　）
3 白岩月平（縄・中）
4 白岩古高（　縄　）
5 白岩藪上（縄・中）
6 白岩尾掛（縄早前後）
7 石坂助地沢（　縄　）
8 下白岩根骨（縄・前）
9 日中上野東林（　縄　）
10 日中松原（大永銘経塚）
⑪ 日中墓ノ段（縄中・須恵）
12 日中墓ノ段（北）（縄・中）
13 日中（墓地）（戦国土塁）
14 日中玉橋（伝式内社・経塚）
15 日中魚梁場（藤塚古墳）
16 館（弓庄城址）
17 末上野龍ケ浜（縄早～中）
18 野沢龍ケ鼻（縄・中）
19 野沢苦情地（縄・中）
20 野沢狐巾（　縄　）
21 野沢大谷（南）（　縄　）
22 野沢大谷（北）（縄中～晩）
23 金剛新東江添（縄中～晩）
中村
女川
女川新
藤塚
下福来
東野新
上女川新
日中
柴山
館
上福来
上市町
野沢
高野
金剛新
四谷尾
日中上野
虫谷川
谷口
下白岩
福田
上中
虫谷
長屋
石坂
金剛寺
末上野
上段
下沢
中蔵
上宮
白岩
東谷

1. 遺跡の位置と現状

日中墓の段遺跡は立山町日中小字墓の段176番地の水田で発見された。上段段丘北端部の東縁，標高約65mの地点である。

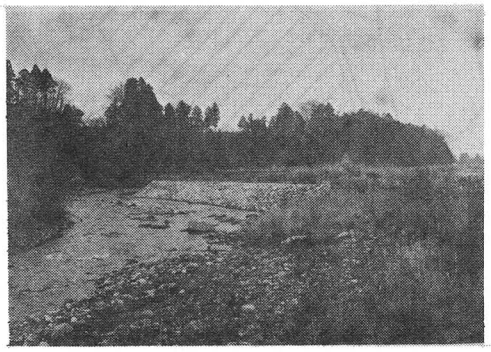
上段段丘は常願寺川扇状地東縁の高位段丘の中，最下流のもので南北約6.5Kmにわたって細長い卓状台地を呈している。西側には栃津川，東側には白岩川が北流し，その数条の支谷が段丘を開析して地形に変化を与えている。

段丘の縁辺は縄文遺跡として絶好の立地条件を具えており，早期から晩期にかけての遺物の散布地が列をなしている。（第1図参照）　それらのほとんどは水田や畑地の下に埋蔵されているが，近年，土地開発の波がこの辺りまで及びはじめ，埋蔵地破壊の危険が迫りつつあり，憂慮される。

日中墓の段遺跡は凝灰岩層（第四紀谷口凝灰岩層）を基盤としているので居住地に適した高燥性があり，また白岩川が比高20mの崖下に迫っていて，豊富な生活用水と川幸の供給源になるという好条件に恵まれた土地である。

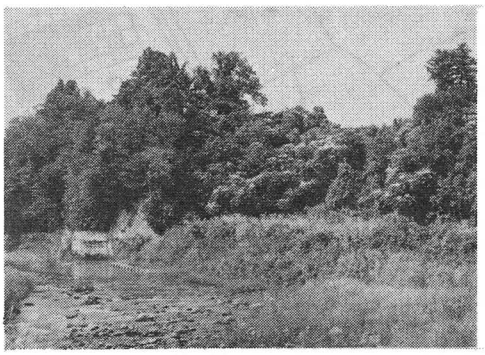
近辺の水田からは古墳時代から平安時代にかけての土師器や須恵器の出土がみられている。また仿製方格鏡を出土した藤塚古墳や，大永年代銘のある経筒を出土した日中（松原）経塚など墳・塚の類も多い。集落の鎮守は延喜式内社に比定されている日置神社である。共同墓地には弓庄城攻防に関る戦国時代の土累跡がある。以上のように一帯は連綿とした各時代の遺跡を留める歴史的風土である。

（写真　①）



日中墓の段台地遠望
（白岩川上流方向より）

（写真　②）



同
（白岩川下流方向より，露頭は凝灰岩層）

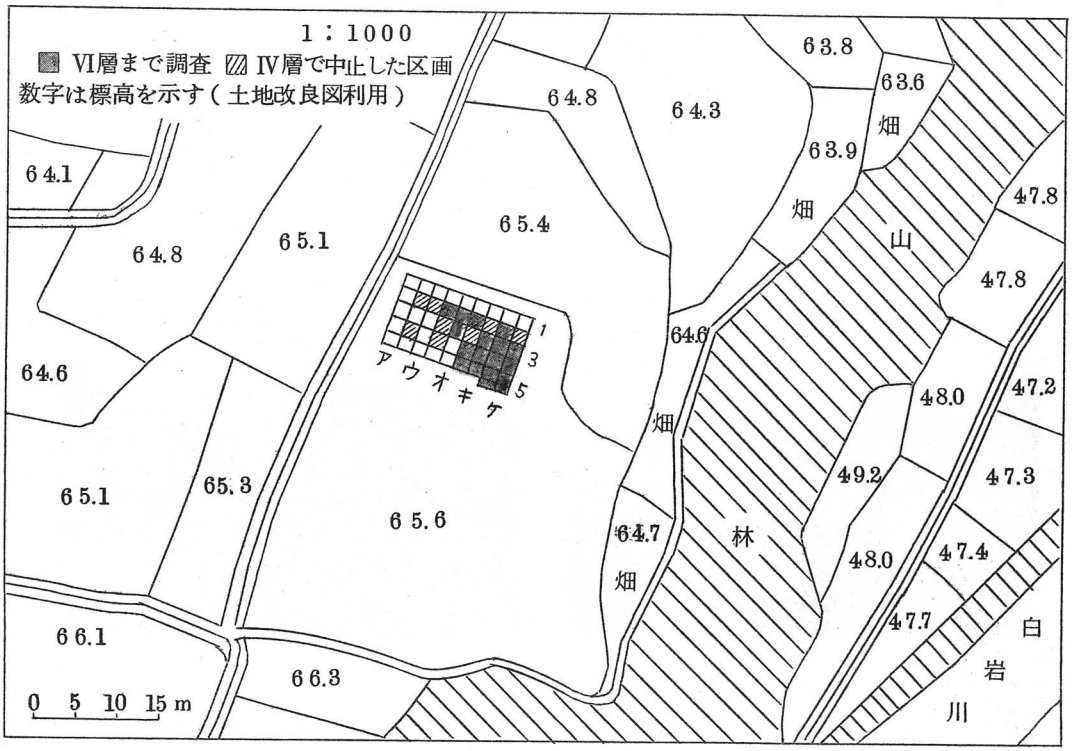
2. 調査の目的と経過

当遺跡の存在は，数年前水田の畦から土器片や石錘・石斧などが採集されたことによって推定された。採集品は縄文中期後葉のもので，立地条件からみても当地域における縄文文化最盛期を代表するものであろうと思われた。当初，遺跡は2枚の水田になっている約30αの地域に拡がっているものと推定したが，耕作者の話によってもと8枚の水田だったものが7，8年前に2枚に整備されたものであることが判明し，その際いくらかの部分が破壊されたと考えられるに至った。畦で採集された遺物もその際に土と共に移動し，表面にでたわけである。

近年，立山町東部地区土地改良計画がたてられ，程なく大がかりな圃場整備工事が始められようとしている。当地は微隆地なので整地の際には削剝されてしまう危険性がある。埋蔵されている遺跡の状況を事前にとらえ，あわせて目下編纂が進められている立山町史に資する目的をもって発掘調査の計画がたてられた。

調査は富山県考古学会幹事岡崎卯一先生を指導者とし，町文化財調査保護委員会が中心となって進められた。昭和47.年10・11月の好天の日曜・休日を拾っての 飛び石的日程であったので，調査範囲も一部に限定したものとなった。

（第2図）　調査地域および区画図



3. 調 査 の 概 要

上の水田の北西部を調査区域に選んだ。これは地形的にみて遺構存在の可能性が推定されることと，以前の圃場整備で手が加えられていない部分ということによる。2m平方の区画を設定して進めたが，調査域の東南部に遺構が発見されたので，そこに重点をおき，最終的には25区画を発掘した。そのうち8区画は第Ⅳ層までで中止した。

(1) 土 質 層 序

調査地域の土質層序は標準的にはつぎのような構成がみられた。（第3図参照）

○第Ⅰ層：灰褐色，粘土質土。耕作土。厚さ13㎝。

○第Ⅱ層：淡灰褐色，粘土質土。下部に礫や磨耗した土器片を含む。厚さ8㎝。

○第Ⅲ層：黒褐色の堅い層。いわゆる鋤床であろう。礫や土器片を含む。厚さ3㎝。

○第Ⅳ層：黒色粘土質土。土器片や礫を含む。Ⅱ層～Ⅳ層上部の土器片は主として縄文土器であるが稀に須恵器，土師器，施釉陶器（初期越中瀬戸焼）片が出土した。Ⅳ層の厚さは5～18㎝。

○第Ⅴ層：黒褐色粘土質土。縄文土器片や礫，木炭片を含む。遺構包含層。厚さ5～12㎝。

○第Ⅵ層：黄褐色粘土層。

(2) 遺 構 に つ い て

5ク～5ケの区画を中心とした竪穴が1個発見された。（写真⑧。第3図） ほぼ南北の方向に沿った1辺2.2mの方形のもので深さ約20㎝掘り込まれている。竪穴内部の周囲には壁面に沿って5個の柱穴状ピットがある。竪穴部分の第Ⅴ層は特に厚く約30㎝あり，木炭や礫，剝石片，石器，土器片を特に多量に含んでいた。30㎝も厚さがありながら土質的にも出土品の点からも上下の年代差はなく一時点の層と認められた。

出土遺物については別記するが特徴的な所見としてつぎのような点が挙げられる。

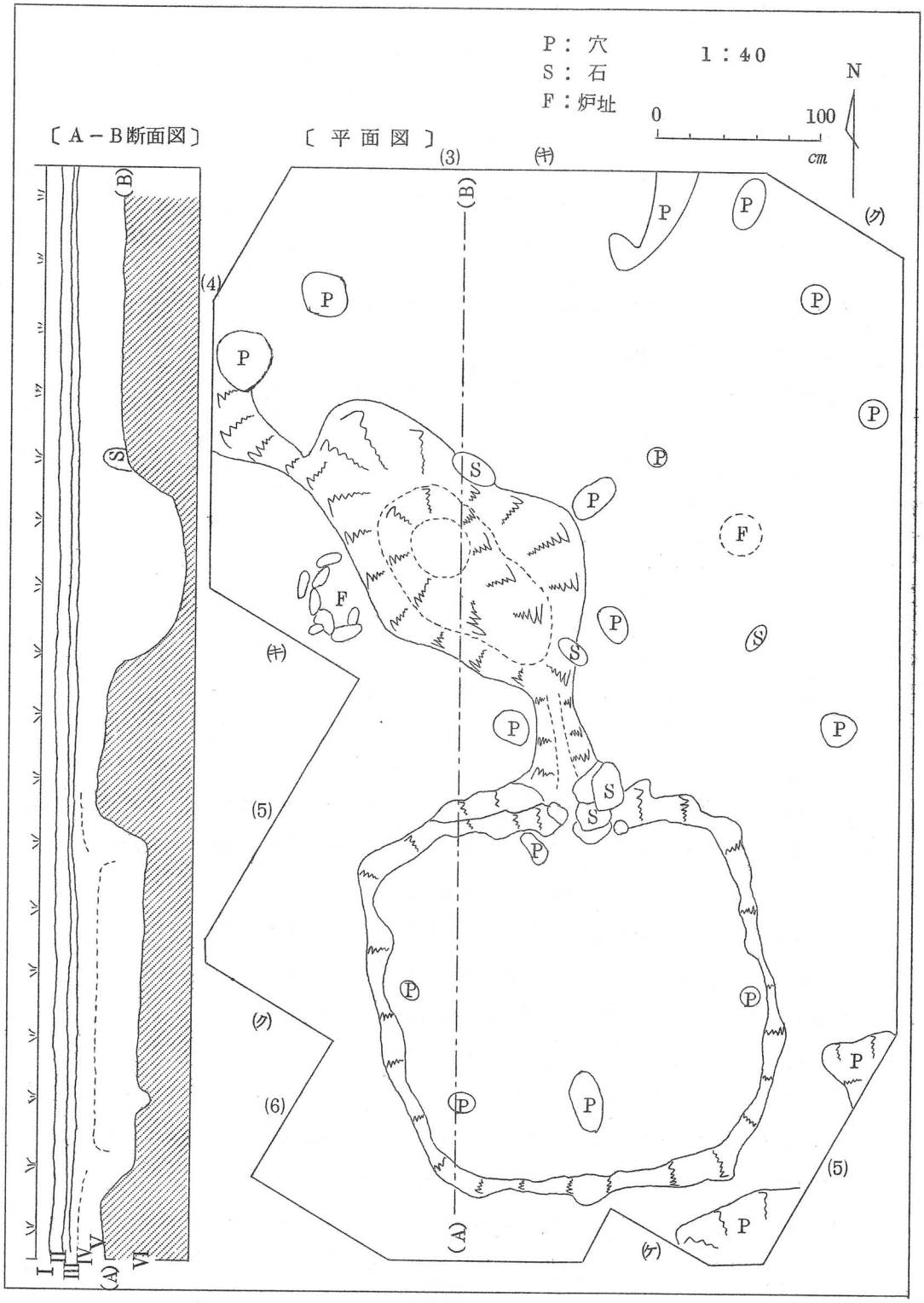
① 土器片はかなり多量に出土したが，同一個体として接合復元できるものは意外に乏しく，しかも同一個体の破片でもかなりの距離に散乱している状態であった。

② ほぼ復元できた土器は つぎの2点である。これらは散乱していなかった。

㋐ 壷形土器（写真㊹～㊻，⑤，第6図⑬）。竪穴中央部の南壁近くに，南向横倒しになっていた。ほぼ原形を保っていたので，当初から何かで充満されていたものと思われるが，発掘時の内容物は第Ⅴ層の土質と区別がつかなかった。

㋑ 波状口縁深鉢形土器（写真⑩～⑫，⑦，第5図③）。竪穴東半部の中央に潰れていた。最も美麗な個体である。底部は発見できなかった。

（第3図）　小型竪穴周辺遺構



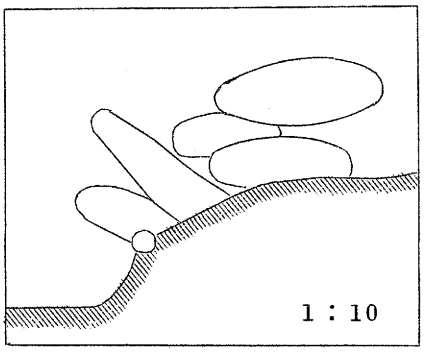
③ 竪穴中心線の南壁に接する部分から土偶片が1個出土した。（写真 ㊽ ㊾，⑥） また，南よりの中央部からは刺突文のある塊状土製品（写真 ⑤⑨ ⑥⑩ ）が1個出土した。

④ 石器では打製石斧2個，凹石2個，磨製石斧3個，皿形凹石2個，石錘7個，砥石状石多数，剝石片多数が出土した。打製石斧の1個は硅化木を利用したものである。

⑤ 石錘が比較的多量に発見されたが，そのうち3個はほぼ同じ深さで 10数cmの等間かくで埋っていた。

⑥ 石鏃は1個も出土しなかった。

（第4図） 竪穴北側の石組み断面図
（東側よりみる）



竪穴の北側中央部から 北に（4ク区画）約1mばかり溝がのび，2m×1m×深さ50cmばかりの穴に連結している。（写真⑨，第3図参照）

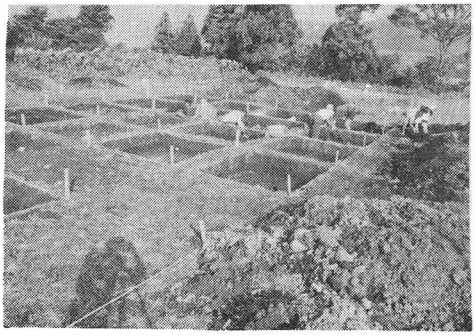
竪穴と溝の境には 数個の平板状石を重ねた石組みがあった。この石組みは竪穴側の何かを押えているように重ねられている。（第4図参照）

4キ区画には 数個の石を並べた炉址状の遺構があった。これはV層上面を上部にしている。そして，4キ～4クの大穴によって切断されたようになっている。この遺構はV層を基盤にしていること，上層のものが下層のものに切断されているとなると疑問点が残るものである。（写真⑨，第3図参照）

4クと3クの境界部分で埋甕炉址が発見された。（写真⑨，第3図参照） 同一個体の土器の口辺部破片（写真 ⑥① ⑥② ）を直径23cmに囲み，内面にはすすが付着している。器内床面は 約10cm低い焼土であった。その周辺には床面が拡がり，数個のピットも発見されたが住居址遺構としての全容を確認するまでには至らなかった。

2エ区画の第Ⅳ層では打製石斧が3個，磨製石斧が3個出土した。（写真 ⑦⑥） また3キ第Ⅳ層や4カ第Ⅳ層（写真 ⑥③ ，第5図⑦参照）からは接合復元がかなり可能な土器片がまとまって採集された。このことから第Ⅳ層にも遺構の存在が考えられるが土器様式では年代差は認められない。

③



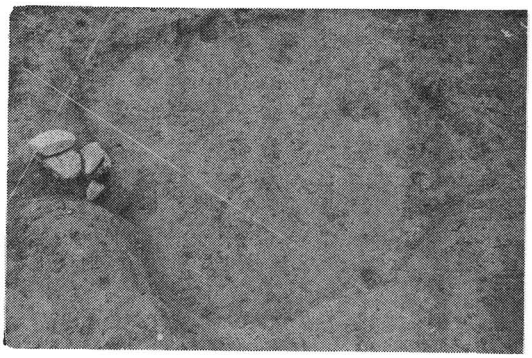
④

⑤

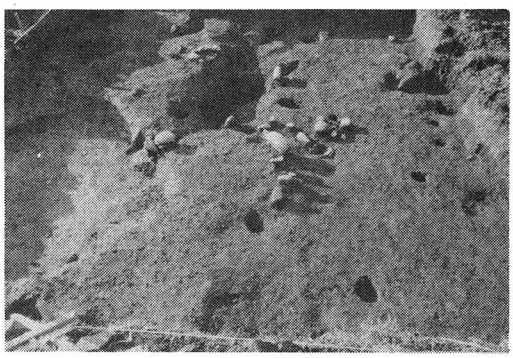
⑥

⑦

⑧

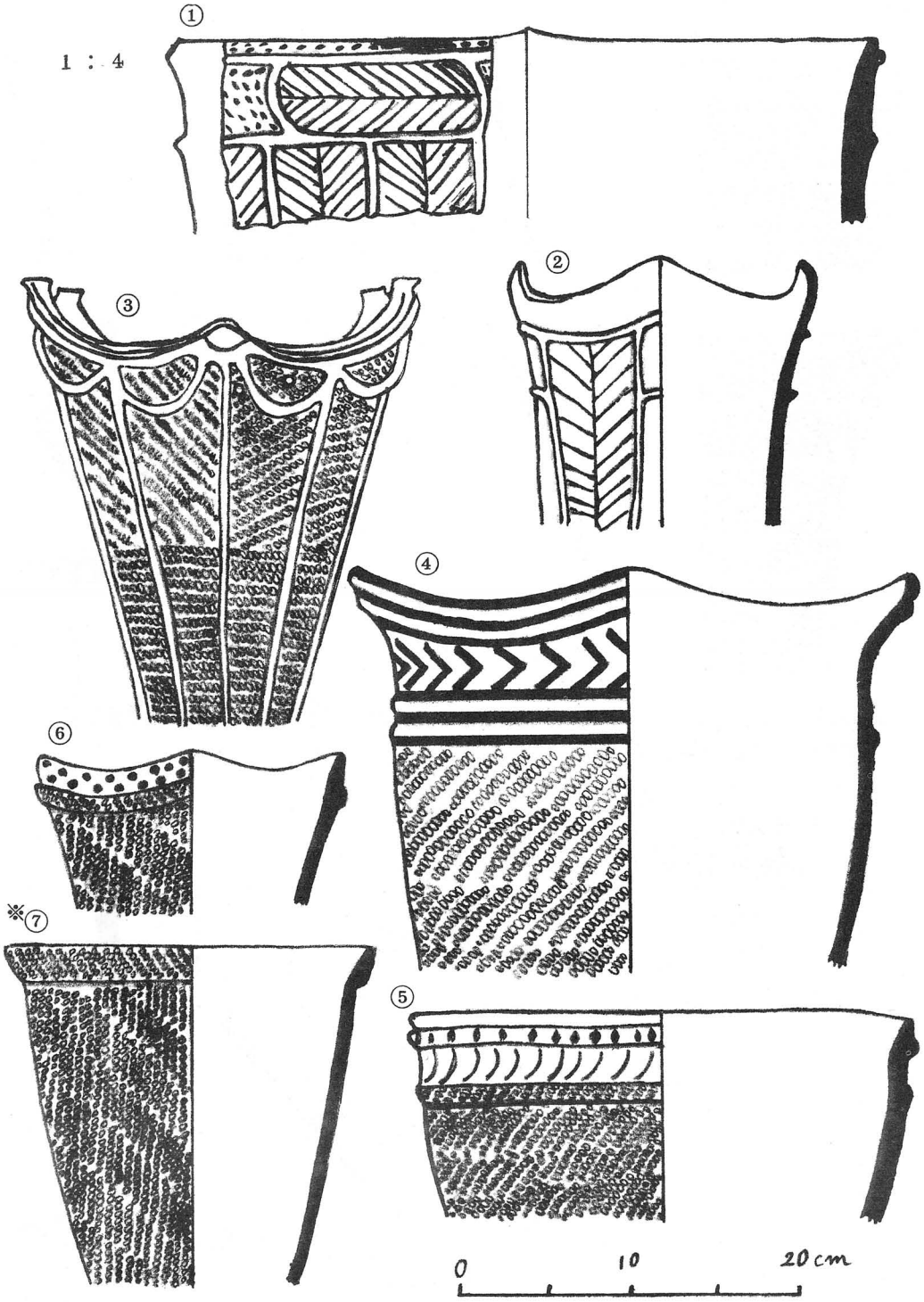


⑨

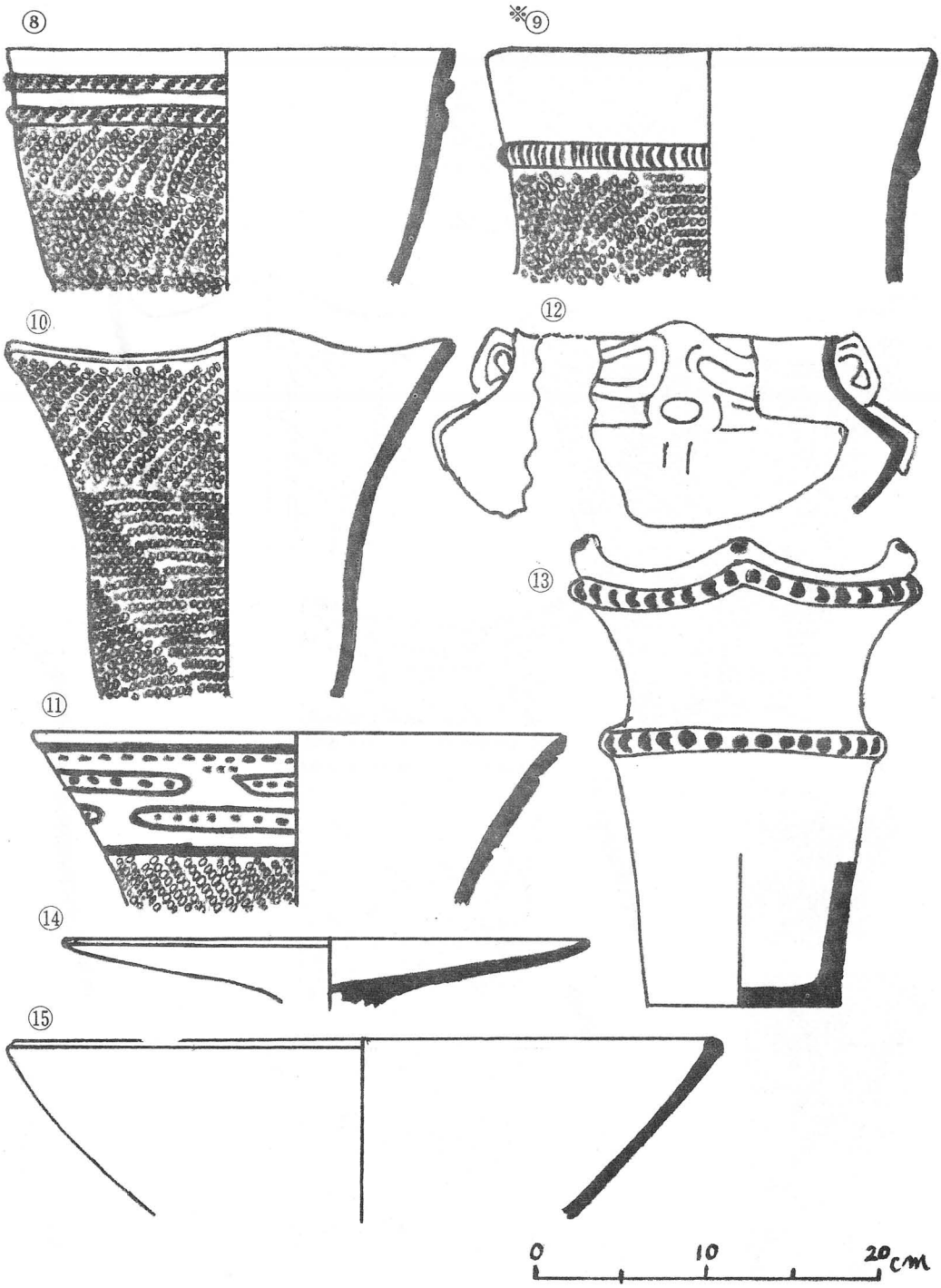


③　調査区域全景　　④　調査区域を南方からみる（手前5クケ区画）　　⑤　5クケの小竪穴底部　　⑥　土偶（写真㊽㊾）出土状況　　⑦　波状口縁土器（写真⑩～⑫，代表土器図③号）出土状況　　⑧　5クケ小竪穴　　⑨　遺構全景（第3図，小竪穴周辺遺構図参照）

（第5図）　代表的土器復元図



（第６図）



※印のものは５クーケの竪穴遺構以外の出土品である。

(3) 遺物について

① 土　器

○ 深鉢形土器

土器の大部分は深鉢形のものである。第5～6図の①～⑪はその代表的なものである。※⑦は4カⅣ層，※⑨は4ク～3ク埋甕炉のもので，この二点以外は5ク，5ケの小竪穴Ⅴ層から出土したものである。（5ク・ケ遺構以外の出土品には※を付ける）

口縁部の状態によって平縁型と波状縁型に分けられる。波状縁型のものは平縁型のものに比べて装飾されている傾向がある。

図①（写真⑭）と図②（写真⑬）は典型的な葉脈状文をもつ。①と③（写真⑩～⑫）は点列文を伴っている。①②③はいずれも施文されない隆線をもち，それが口頸部では縦横に連結されていることや底部まで下垂することに共通点がある。下垂した隆線は途中で横に連結される例が多い。

④（写真㉚㉛）と⑤（写真㉑中）は口頸部を横走させた隆線の間を沈線で施文する型である。下部は縄文。

下縁のものの多くは⑧（写真⑳上右）や⑨（写真 ㊶ ㊷）にみられるように，口径部に1，2条の隆線を横走させ，その上部を無文，下部を縄文としている。⑥（写真㊱）は上部に点列文を施している。

隆線は無文にするものと，縄文や刻み目を施すものがある。

⑩（写真㉗）は隆線を欠き，縄文だけを施した型である。

※⑦（写真 ㊸）は口縁部に厚い隆起帯をもっている。

⑪（写真 ㊹）はこれも隆線を欠き，下部の器形は不明であるが，口頸部に沈線による楕円状の区画文と点列文をもつ型である。

地文の縄文はLR（右撚り二段）の原体を⟷方向に回転させたものが圧倒的に多い。他にLR↖↘（写真⑩，⑮上右，㉖上左，㉗，㊳，㊶ ）やRL↖↘（写真⑱上右，㉟，㊱，㊸），RL⟷（写真⑳下右，㉔，㉖中右，㉞）がある。③には部分的にR（左撚り一段）⟷の施文がある。原体を↖↘方向に回転させる手法はこの文化期の特色とみられるものである。

深鉢形土器の底部の直径は13例の所見では11㎝～13.5㎝の範囲に含まれる。（写真㊲～㊶）。底には当時の敷物の痕跡が留められている。網代編み（写真㉕）が6例，むしろ編み（写真 ㊸）が2例，木の葉や笹の葉（写真 ㊷）が2例みられる。

○ 壷形土器

⑬（写真 ㊹～㊻）は刻み目のある隆線を口縁部と肩部にめぐらした厚手の土器である。他に類品は見られなかったが，ほぼ完形を保って発掘されたことから特殊用途を感じさせる。⑫（写真 ㊼）は注口土器状のもので把手がある。把手の数は不明である。⑫も⑬も隆線を付けただけで，他は無文である。

○ その他の土器類

浅鉢形土器（図⑮，写真 ㊶ ㊷）や皿形土器（図⑭，写真 ㊿ ）がある。いずれも無文である。無文の土器片はその他少量みられるが数の乏しい類と思われる。

○ 他の文様をもつ土器片について

a．貝殻を押圧した文様をもつ類（写真※ ㊹）

隆線や隆帯に貝殻腹縁文を施し，太い沈線文を組み合わせる文様は当地域中期後葉の典型といわれているものである。また表面採集ではかなりの数が当遺跡でも見られていた。（写真 ㊽）ところが発掘調査での出土は意外に少なく 4キ・クⅣ層などから 10 数点の破片を見たにすぎなかった。とりわけ 5ク・ケ竪穴遺構からは 7 点の小破片しか出なかった。

b．三角形細隆起線文（写真※㊸ ）

4クや 5キ，5クのⅣ層から合計数点の出土をみた。竪穴遺構ではみられなかった。

c．条 線 文（写真※㊺ ）

9 点の破片が出土した。そのうち 6 点は竪穴遺構に包含されていた。

d．撚 糸 文（写真※㊻ ）

数点採集された。竪穴遺構からは 1 点のみ，他は 4クや 5ケのⅣ層から出土した。

e．半截竹管文および爪形文（写真※㊽ ）

中期中葉に属する類である。わずかに痕跡を示す程度の出土をみた。竪穴遺構から 3 点出た。4クや 5ケのⅣ層にも包含されていた。

f．刻み目のある細隆線文（写真※㊼ ）

2エⅣ層から同一個体の破片が数点採集された。この類は吉峰遺跡の前期中葉のものに類似性を感じさせるものである。

② 土 製 品

○ 土 偶 （写真 ㊽ ㊾）

約 1 cmの厚さのもので，左手および下半身は欠失している。また頭に当たる部分には焼成前にあけられた穴が通っている。乳房が突起し，女性を象徴している。

○ 塊 状 土 製 品（写真 ㊾ ㊿）

円形の刺突痕がある以外に形状の判然としないものである。中心部の厚さ約 3 cm。焼成されている。土偶に類するものであろうか。

② 石器・石片類

磨製石斧（写真※64）では断面が長方形状の定角式のものが主体をなしている。

打製石斧（写真※65）は一般的に小型である。安山岩質のものが多いが，硅化木を利用したものが1点ある。（上右）

石錘（写真※66）が比較的多量に出土した。石錘は常願寺川流域遺跡のものよりも小型のものが多い。ただ1個だけ特大のものがあった。（写真※67）

凹石（写真※68）が数個出土した。皿状の凹石（写真※69）もみられた。

5ク・ケ竪穴遺構には人為的に持ち込まれた礫や石片が大量にみられた。（写真④） 磨耗痕のある砥石状のもの（写真71）や定形的な円形のもの（写真72）も多くみられた。とりわけ剝片石類（写真73～75）が多くみられた。黒耀石の小片も2点見られた。

4. 考　　察

日中墓の段遺跡は縄文中期後葉を主体とした遺跡であるが，縄文前期中葉，中期中葉および古墳時代以後の各時代の土器が痕跡的に認められるので，一帯は複合遺跡と思われる。

中期後葉ということで今回の調査で特に注目されたのは5ク・ケ竪穴遺構の土器類が隆線文を主体とし葉脈状文を伴っているのに，貝殻腹縁文が極めて乏しかったことである。表面採集でかなり認められた貝殻腹縁文がこの遺構になぜ普遍的に見られなかったのであろうか。貝殻腹縁文と葉脈状文とについては以前から地域的差異か年代的な差異かで異論が出されているが，今回の調査の限りでは後者の見方をしたくなる状況であった。いずれにせよ当遺跡には，どこかに貝殻腹縁文を包含する遺構が存在する可能性が強いので，さらに精査して問題点の解明が待たれる。

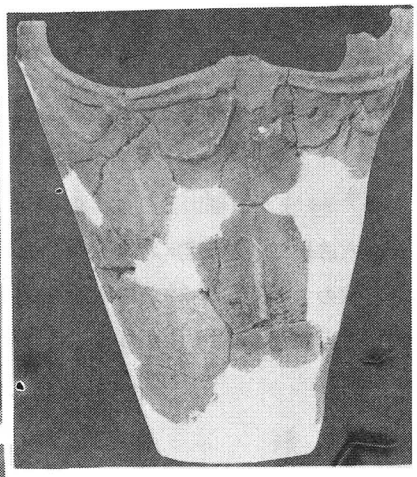
竪穴遺構については規模が小さいことや，遺物の包含状況，石組みなどから住居址とは即断し得ない特殊性が感ぜられた。

石錘が多く，石鏃が発見できなかったことは　当遺跡が川漁中心の生活に基くものであることを示していると思われる。その点での立地条件は最適なものがある。表面採集の所見では遺跡は段丘縁辺を北に展がっているのでより大規模な調査が期待される。

○ 追　　記

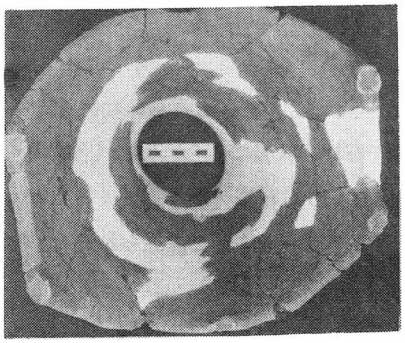
この調査には町教委事務局や地元有志，雄山中学同好者など多くの方々の協力があった。紙面の都合上氏名は省略するが　謝意を表する。調査を快諾し便宜を与えられた耕作者有沢小一郎氏に敬意を表する。調査の整理や記録は松岡宗次，女川米次郎，佐伯令麿，安田良栄の四名が主として担当した。

土器および土製品

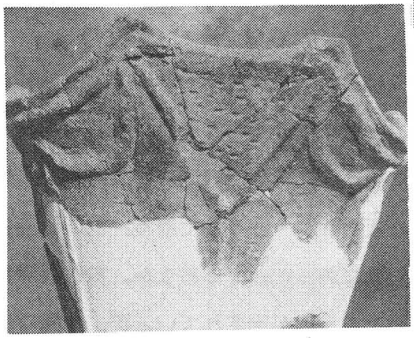


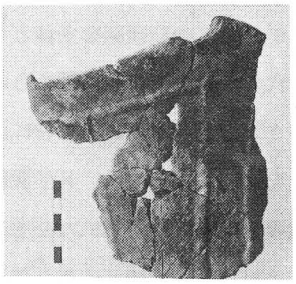
⑩

⑪



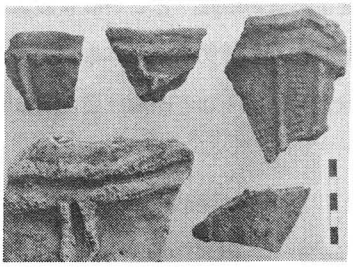
⑫

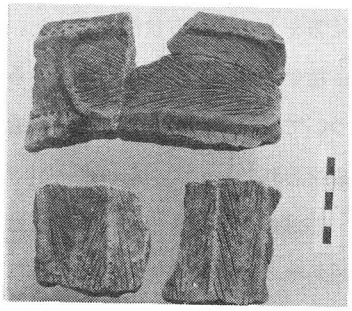




⑬

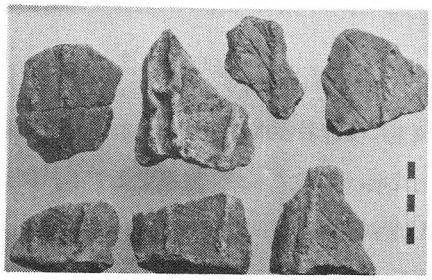
⑮





⑭

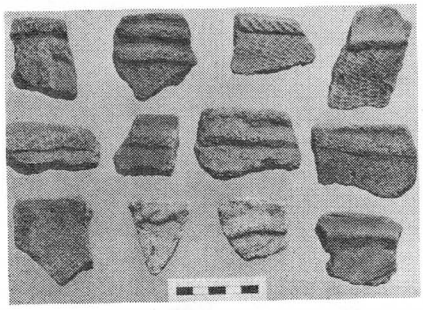
⑯



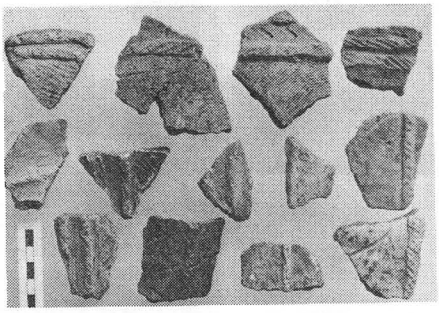
⑰

土器および土製品（続）

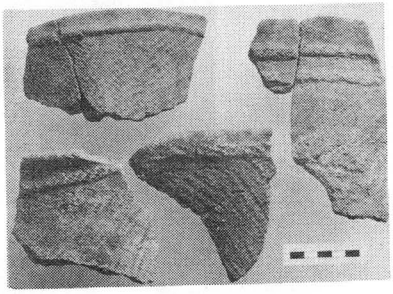
18



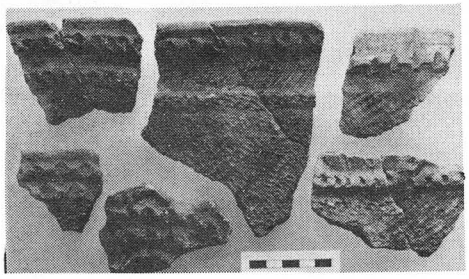
19



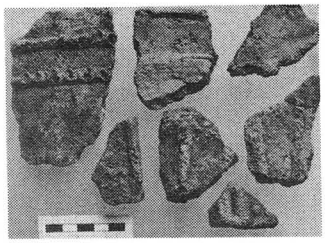
20



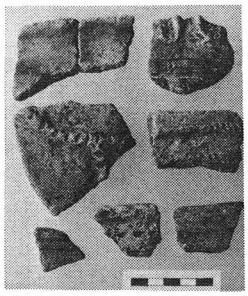
21



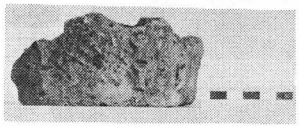
22



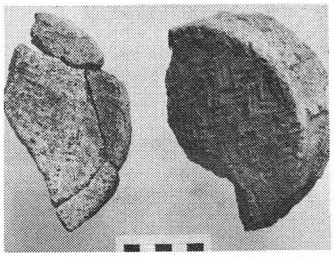
23



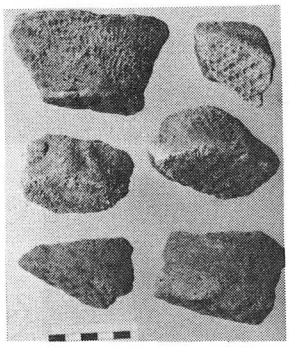
24



25

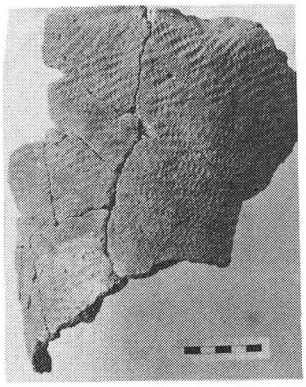


26

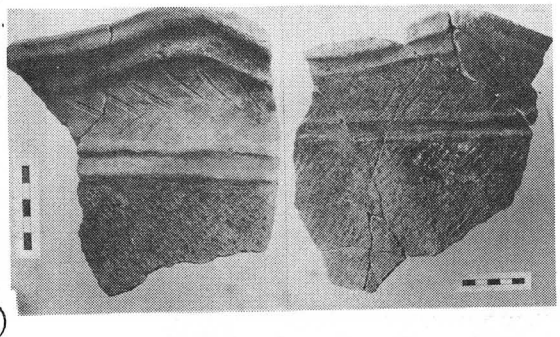


土器および土製品（続）

27



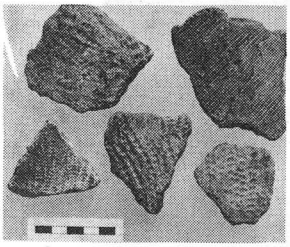
30

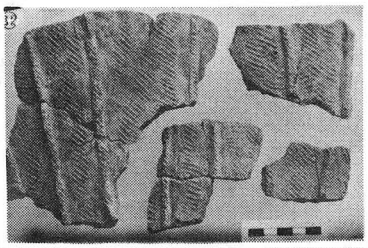


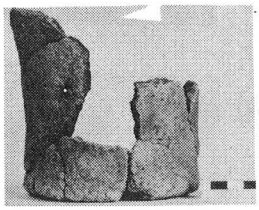
31

32

28





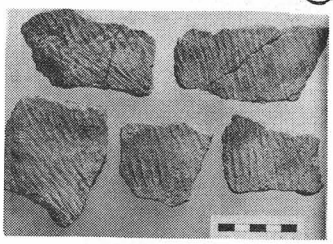


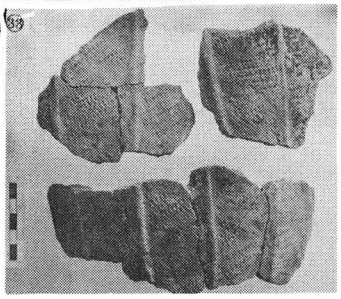
39

40

33

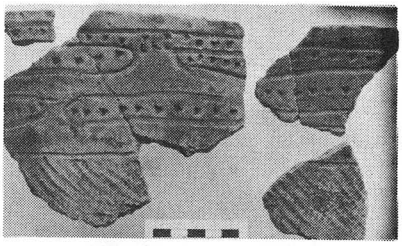
29

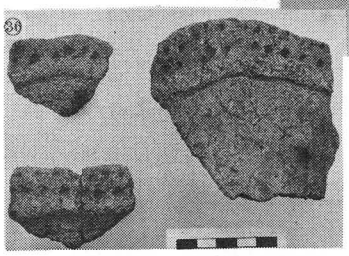


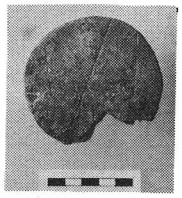


41

34

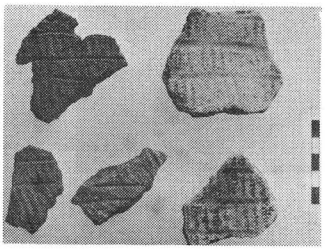




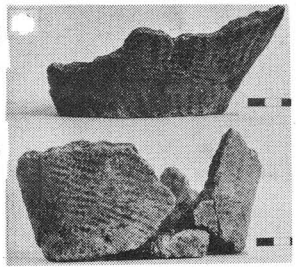


42

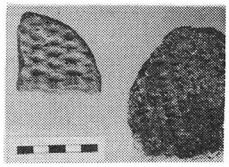
※35



37

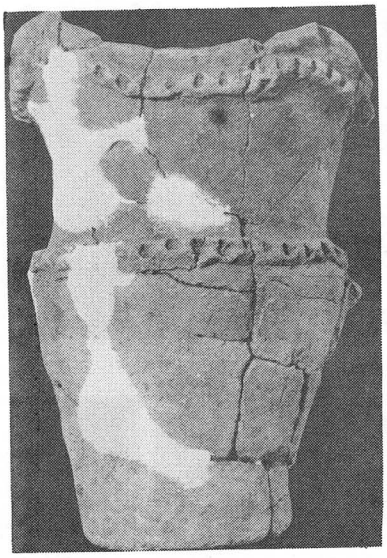


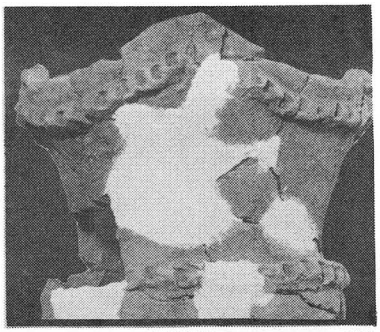
38

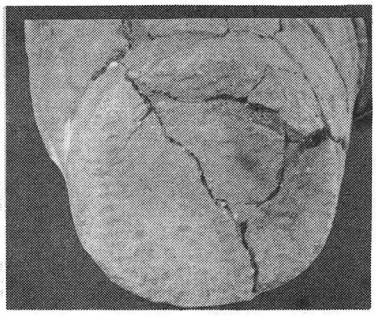


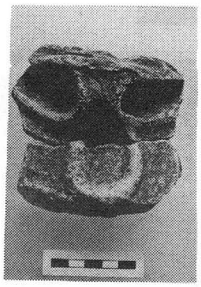
43

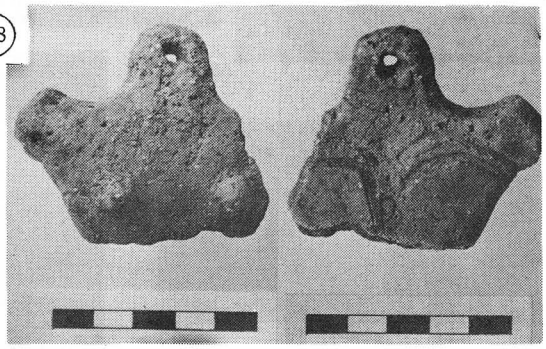
土器および土製品（続）


44

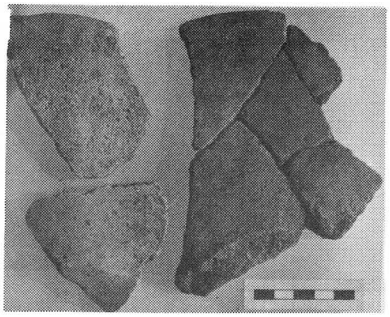

45


46

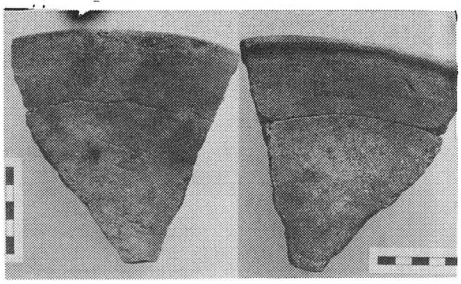

47


48

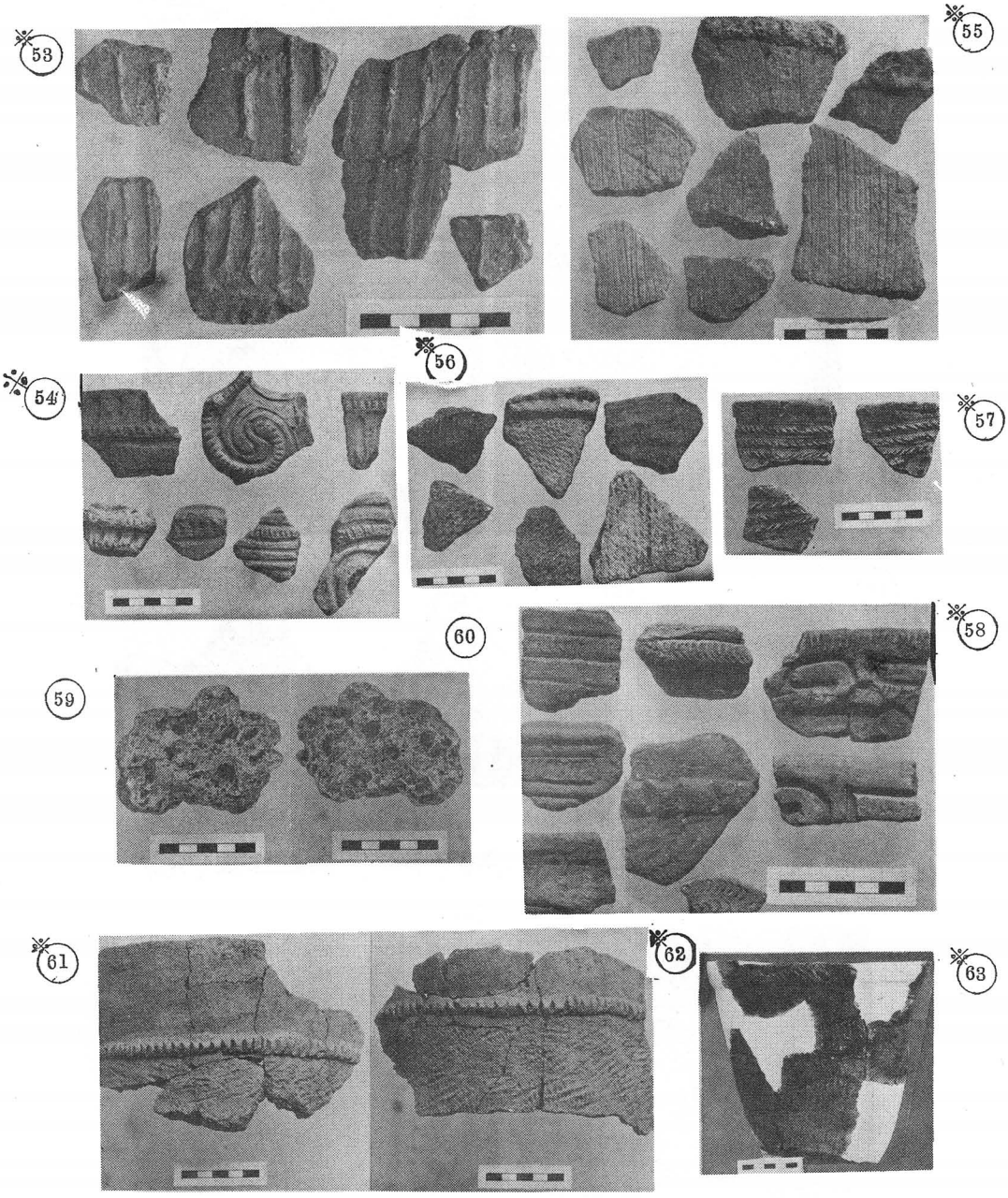
49


50

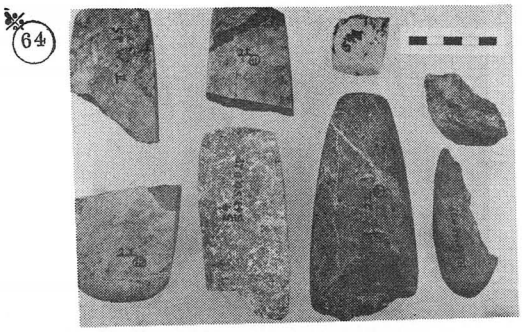
51

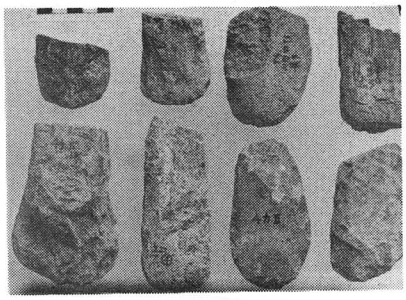

52

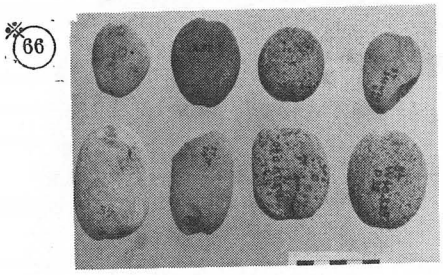
土器および土製品（続）

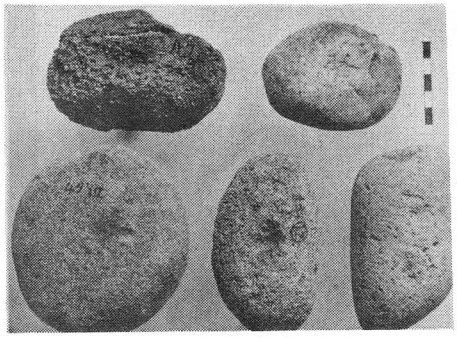


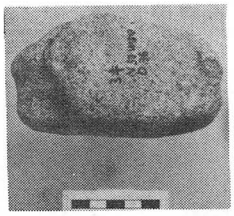
石 器 類

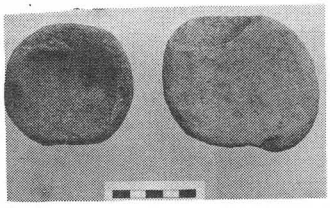


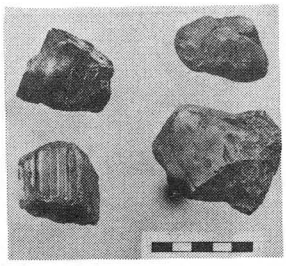


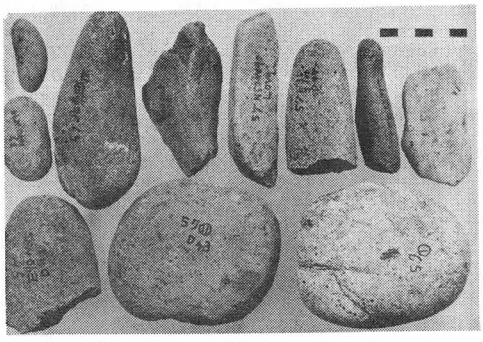


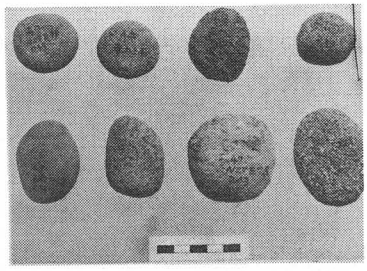






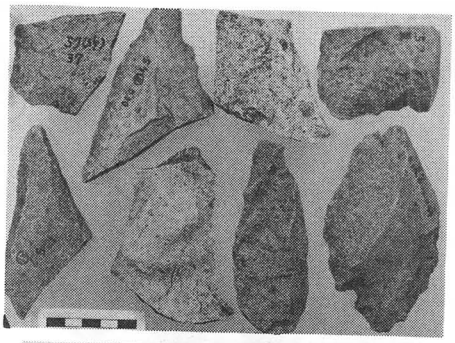




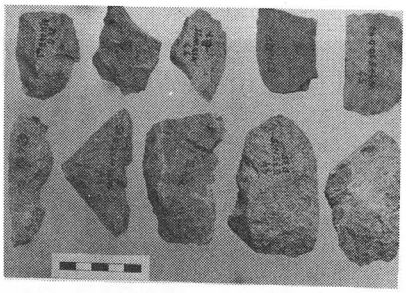


剝片岩類

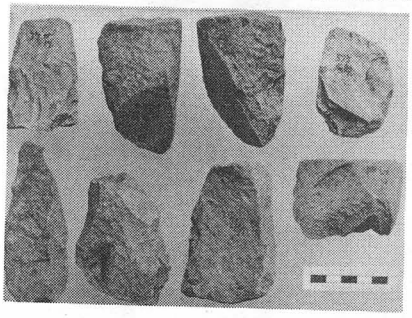
73



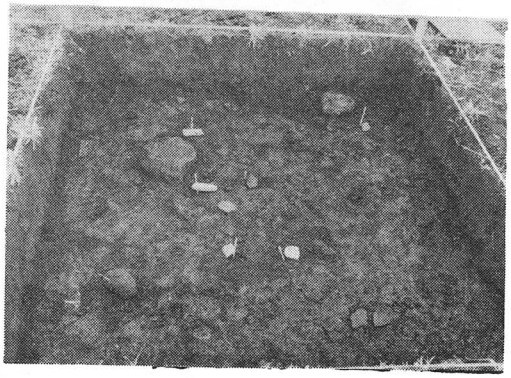
74



75



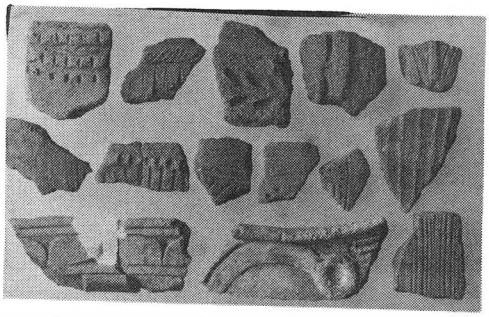
76



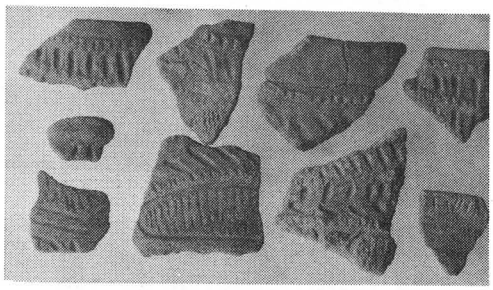
表面採集遺物

2 工区画第Ⅳ層

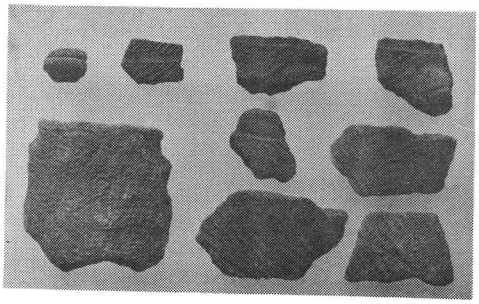
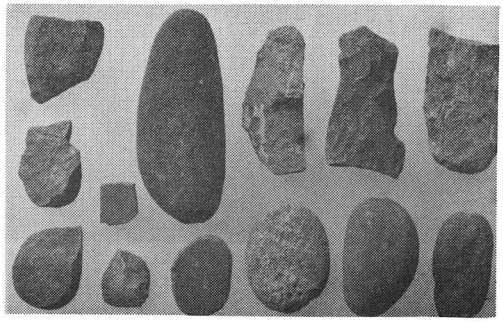
77



78



79



80